

トンネル工事を見守る山の神(4)

山の神と化粧木(その3)

東日本高速道路(株)技術部次長 阿部 公一

化粧木は神様が降臨するための「依代」

神が俗界に降下するには、樹木・樹枝などの自然物、柱、呪物などが神の招代や依代になるといわれる。同様に山の神は大きな岩石や高い木、あるいは二股の木などに宿るとい¹⁾。

依代とは、祭りにあたって神様をお招きする際に、その神霊が依り憑き宿るところのことである。そもそも神は、目に見えない存在であり、その神霊は人間の世界に常在することはない。そのため神意を知るには、神霊を招き寄せる必要がある。そこで神が降臨するための媒介物、つまり依代を用意して、そこに神霊が顕現するという²⁾。依代があって、神様との交流が可能となるわけである。

化粧木を作製するのに、最近はその資材を製材所に頼っているが、かつてはトンネル掘削する山の木を用いたといい、このことは祭礼が行われる際、山の神は山から伐り出された若木に依って里に下りてくるという話にも重なる³⁾。

また、化粧木の上に米俵を載せたり、さらに坑口付け(安全祈願)の際に使用した御幣や神主の「祓え串」を置くこともある。この御幣や祓え串も山の神が降臨する依代である。このことは、天上にある山の神は、祭祀のときなど人間の求めに応じて化粧木ないしそこに添えられた御幣や祓え串を依代にして下りてくると考えることができる。

しかし、山の神はいつも坑内のもっとも奥に常在しているといわれ、招きに応じて降臨し化粧木に宿るといふ考えとは整合しない。このことを深く考えると、トンネル工事従事者が信仰する山の

写真-5 坑口の上に置かれた社⁴⁾

神のありようや、トンネル工事にかかわるさまざまな禁忌にまでつながってくるような気がする。

神社は神の座す社であるが、古くはそうした社というものはなく、先に述べた樹木や岩石を依代とした。

昭和50年3月に供用開始した中央自動車恵那山トンネルの坑口写真が残されている。この工事中の坑口写真には、化粧木がなく、その代わりに小さな木製の社が写っていて、この社には山の神が祀られていたと想像できる。やはり坑口の真上に「山の神」を祀り、トンネルに出入りする者の安全を見守ってほしいと願ったのだ。かつては山の神が坐す社を置いたが、同様な気持ちが化粧木にも込められていると考えても不思議ではない。実際に、あるトンネルの建設工事では、毎月、月初めに化粧木に水と榊を供えたという証言があり、山の神が坐す社と化粧木との間に、坑夫たちの気持ちに、差はほとんどなかったと思われる。現在では、化粧木の上にさらに社を置いて念の入った工事現場もある。

山の神は、1年中山にいて、山で働く人々を守っ

てくれるのである。同様にトンネル工事では、坑口に依代である化粧木や社を置き、山の神は始終この化粧木に依り憑いたり社に坐して、工事従事者を見守っていると考えると、化粧木の有難さもひとときである。

神社の象徴・勝男木(カツオ木)とす

化粧木の来歴を神社社殿の勝男木^{かつおぎ}に求める意見がある。勝男木は鳥居と同様に神社の神聖さを象徴していて、山の神の存在を示す記号を予感させる。アンケート調査対象の四分の一の人も何がしかの関連を認めていて、「伊勢神宮本殿の屋根の飾り木を模倣している」とする意見が複数あるが、伊勢神宮に限定する由縁は説明されていない。

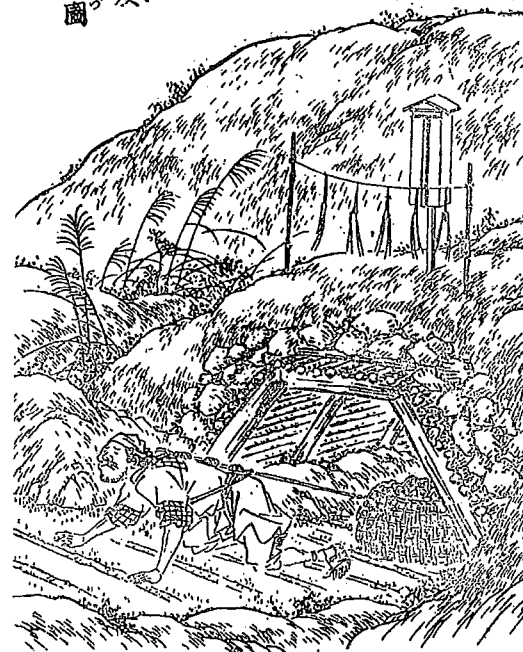
勝男木はほかに、堅魚木、鯉木などとも書き、神社建築の屋上にある棟木と直交に横並びした棒状の単材のことである。神社・寺院の屋根には、信仰の対象として威厳を表現する飾りが付くが、勝男木は千木と同様に神社の棟飾りとして用いられ、神社の尊厳を示す象徴でもある。

神社の勝男木はあくまでも装飾であって依代ではないが、化粧木の来歴を勝男木とする説に、その形の非対象性をもとに、「化粧木の右(根元部)には天照大神、左(木先部)にはウツヤフキアエズの命(神武天皇の父親)を祭る」と説明する者がいる⁵⁾。さらに、アンケート調査回答者の中に、「左大臣、右大臣」とのかかわりを指摘した者がいるがその由縁は不明である。

幕政期の炭鉱にみる坑口

森崎和江は寛政10(1789)年頃の筑前の炭掘りの記事を収めた『兼葭堂雑録』に描かれている「石炭堀の図」に触れ、「すすきやおみなえしの乱れる山腹に、這い出るほどの坑口が開かれていて、その坑口の上の山土に二本の短い竹が立てられ、この間にしめなわが張ってあり、そのひらひらす

石炭堀の図

図-3 「石炭堀の図」⁶⁾

るしめなわのむこうに、やはり山土に突き立てられたちいさな細長い木造りの祠がみられる」と幕政期の炭鉱坑口を描写している⁷⁾。

当時既に石炭を専門に掘る坑夫が専門化していた。彼らは坑口にしめなわや祠を置いて、身の安全を祈念していて、現在のトンネル坑口上の化粧木に通じる雰囲気を感じさせられる。

参考文献

- 1) 萩原秀三郎：地下他界 蒼き神々の系譜，工作舎，1985.7.
- 2) 戸部民夫：日本の神々，新紀元社，1998.11.
- 3) 佐々木高明：山の神と日本人，洋泉社，2006.2.
- 4) 日本道路公団名古屋建設局：恵那山トンネル工事誌，1977.8.
- 5) blog はろると，<http://hal.blog.eonet.jp>
- 6) 木村孔恭：兼葭堂雑録 卷之五，日本随筆全集第五卷.
- 7) 森崎和江：奈落の神々 炭坑労働精神史，平凡社，1996.7.